



2022 Summer
Referee's Report

全国大会参加報告

- ・ 令和 4 年度 全国高等学校総合体育大会
- ・ 第 46 回 日本クラブユースサッカー選手権(U-18)大会



令和4年度 全国高等学校総合体育大会

参加報告書
兵庫県サッカー協会

中川 琢士



はじめに

7月24日～31日に徳島県で開催された全国高等学校総合体育大会に高体連研修審判員として参加しました。大会関係者ならびお世話になった徳島県サッカー協会、推薦いただいた兵庫県サッカー協会、高体連の方々に感謝申し上げます。

7月24日(日) 1回戦

徳島市球技場第2球技場

富山第一 0-1 札幌光星

R: 佐々木慎哉 A1: 小林勇輝 A2: 中川琢士 4th: 青井 康祐

A2はテレビ放送等で一番映ることもあり、判定だけではなく、「魅せる」ということが大事であるとアドバイスをいただきました。いつもやっているよりも3秒ほど間を置いて、きちんと一度止まって旗を振ることが大事であると指導していただきました。またクーリングブレイクを採用し、全選手がベンチに入ってから3分取ることが徹底されていました。

1 日目研修会

ホテルに戻り、zoomで各試合の報告と共有事項を話し合う研修会があった。その中で、CKからゴール前の混戦の中、DFがゴールに入りそうなボールを手で防いでA1 がフラッグアップしたが、手で防いだ選手の番号が特定できないという事象があり試合が中断したという報告があった。

審判員全員が役割を分担して、A2 や4th も番号を注視したり、試合前の打ち合わせをしっかりとしなければならないと再確認した事象であった。

7月25日（月） 2 回戦

徳島市球技場第1球技場

青森山田 1-2 帝京

R: 北沢倫章 A1:中川琢士 A2:小滝良平 4th:村田裕紀

この試合は多くの方が会場に駆けつけた試合であった。共にベンチが熱くなるシーンもあったが、4thの村田さんと協力し、主審のサポートができた。







振り返り

3日間を通じて、この猛暑・コロナ感染対策など多くの人がこのインターハイに関わり運営されていました。猛暑のためクーリングブレイク(+飲水タイム)が設定され、選手の安全への配慮が徹底していました。私たち審判員にも多くのスタッフが安全に気を使ってくださいました。徳島県サッカー協会、他関係者の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。この研修会に参加して普段接することのない他府県の審判員と関わりがもて意見交換ができました。特に1級審判員である佐々木さん、伊勢さん、村田さんには移動中や試合後も多くのことをアドバイスいただいたり、他府県の様子等話してくれました。審判活動だけではなく、こうした繋がりがもてたことは今後自分の人生にとって大変プラスになったと感じています。また、1試合1試合に全力で取り組み、全てのチームが一体となって試合を盛り上げていました。その中で審判として2試合経験させてもらい、良い緊張感で4人の審判団で協力してサッカーを選手と共に楽しむことができました。

この経験を教員として生徒達に還元し、チームが前向きにサッカーに関わり、この舞台に出場したいという気持ちになるように部活動に取り組みたいと思います。また、自分の審判活動にもこの経験を活かして今後も頑張っていきたいと思っています。



令和4年度全国高等学校総合体育大会サッカー競技大会 視察レポート

兵庫県 大槻 隼人

参加大会：令和4年度全国高等学校総合体育大会サッカー競技大会

参加期間：令和4年7月23日(土)から令和4年7月25日(月)

場所：徳島市球技場 ほか各会場

宿泊先：スマイルホテル徳島

備考：兵庫県高体連として参加

- 目次
- 1. 担当試合振り返り
 - 2. 試合観戦をして
 - 3. 研修会
 - 4. 終わりに

1. 担当試合振り返り

① 令和4年7月24日(日)11時30分キックオフ 1回戦

会場：ワークスタッフ陸上競技場(天然芝)

対戦：東海大諏訪(群馬県代表) VS 四日市中央工(三重県代表)

割当：増田裕之氏 (主審、北海道、2級)

高田直人氏 (副審1、東京都、2級)

大槻隼人 (副審2、兵庫県、2級)

近藤恭子氏 (第4審、徳島、1級)

インストラクター：西岡昌弘氏

結果：0-0(0-0、0-0、PK3-4) 勝利高校：四日市中央工

[ゲームの内容]

四日市中央工がFWの選手のキープカを押し出しながら終始攻撃しているゲームでした。東海大諏訪はゴール前を固めながらカウンター狙い。結局得点は決まらず、PK戦の末、四日市中央工が勝利しました。

[副審2を担当して]

オフサイドジャッジ、タッチジャッジとも難しい判定もなくしっかりと判断できました。特に、オフサイドの反則の際、普段はWait&Seeが出来ないこともあったのですが、この試合では成立するまで待つなど適切なタイミングでフラグアップができたのが良かった点です。また、ファールサポートに関しては、「明らかな反則は、簡単にファールサポートしてほしい。反則が程度によるもの場合は、アイコンタクトをとりながらしましょう」と事前打ち合わせをしました。試合では打ち合わせ通り、単純なトリップは主審の笛と同じタイミングでサポートができ、ホールディングに関しては反則があったタイミングでサポートするのではなく、主審とアイコンタクトをとりサポートしない判断をしました。反則があっても、焦ってフラグアップするのではなく、主審を意識しながらサポートできたことで成長を感じることが出来ました。

〔審判団として〕

今回の試合では、警告となるか、ならないかの際どい反則が多くありました。主審の方とも、どのタイミングで警告を出すべきだったかと話をしていました。試合を通して、際どい反則を減らすために、警告を出したり、全員に分かりやすいように注意したりする必要があったと思います。自分だったらどう注意するか、考えていこうと思います。四審の方の、タイムマネージメントもとてもやりやすかったです。初めてクーリングブレイクを経験しましたが、四審の方はその時間も集中を切らさず、数分前からカウントし両チーム、審判団が動きやすいようにサポートして頂きました。常に集中を切らさず、全員が動きやすいよう配慮することを私も見習おうと思います。

② 令和4年7月24日(月)9時15分キックオフ 2回戦

会場：ヨコタ上桜スポーツグラウンド(人工芝)

対戦：中京大中京(愛知県代表) VS 高松商業(香川県代表)

割当：増田裕之氏 (主審、北海道、2級)

木戸洋平氏 (副審1、埼玉県、2級)

大槻隼人 (副審2、兵庫県、2級)

網矢守氏 (第4審、愛媛県、2級)

インストラクター：佐賀慎治

結果：4-0(1-0、3-0) 勝利高校：中京大中京

〔ゲームの内容〕

中京大中京の方が、足元の技術やインテンシティが高く、終始高松商業のコートでゲームが行われていました。スコアも実力差通りの点差がついたと思います。

〔副審2を担当して〕

この試合では、ファールサポートについて2つのことを学びました。1つ目は優先順位です。攻撃側競技者がスループラスを出した後、守備側競技者の遅れてのチャージングを受けました。アシスタントサイドではあったものの、スループラスへのオフサイドの判定をするため最終ラインを見ていたため、遅れてのチャージングが間接視野でしか見ることが出来ず、ファールサポートが出来ませんでした。私は、サポートできず反省していましたが、振り返りでは「仕方がない」ということでした。その状況で副審が観察しなければいけない事象の優先順位は、オフサイド、タッチジャッジ、ファールサポートである。特に、オフサイドの判定は副審しかできないので優先するべき、と助言頂きました。私の行動は誤っていなかったものの、優先順位を明確に意識して判断できていなかったのが、今回の事象から副審の優先順位を明確に理解することにつながりました。もう1つは、レフェリースイドのコーナーフラッグポストでの明らかなホールディングによる反則をファールサポートするかしないかです。主審は、串刺しの状況でその反則が見えていないのも分かりました。ただ、距離も遠くサポートしませんでした。インストラクターの方にも、「その距離でファールサポートは難しい」と助言を頂きましたが、副審の位置からクリアに見えていたのでサポートすれば良かったと後悔しています。私が、主審であればサポートしてもらう方が助かります。事前打ち合わせで確認することも大切ですが、「私が主審だったら、どうしてほしいか」という基準で考えることも必要だと思いました。

〔審判団として〕

この試合では、無謀な反則→アドバンテージ→警告という事象がありました。私は初めての経験で、副審をしていて判断するのが遅れたのですが、主審の方はアドバンテージを宣言した直後に「〇番警告」と宣言されていました。このような事象が起こることを常に選択肢の1つにいれておかなければいけないと反省しました。もう1つ初めての経験が、前半後半でそれぞれ1回ずつクーリングブレイクと給水を採用したことです。具体的には前半35分間で15分頃にクーリングブレイク、27分頃に給水というものでした。気温が非常に高く、人工芝のフィールドということもあり、安全面では必要な対応でした。ただし、前半だけでも2回試合が止まり流れが切れるので、気持ちの切り替えが難しかったです。4審の方はベンチコントロールにも苦慮されていました。特に、レフェリーが見えていない明らかな反則があり、ベンチから声があがる場面がありました。4審の方は対応に悩まされていました。インストラクターの方からは、ベンチが正しい時は、ベンチに近づかない方がよい。監督の視野にはいるくらいにとどめる。ベンチに行っても、ベンチが正しいから4審としてはできることが限られると助言頂きました。

2. 試合を観戦して

① 令和4年7月24日(日) 9時15分キックオフ

対戦：関大北陽(大阪②代表) VS 山形中央(山形県代表)

結果：1-0

② 令和4年7月25日(月) 11時30分キックオフ

対戦：四日市中央工(愛知県代表) VS 山梨学院(山梨県代表)

結果：2-1

① 関大北陽 VS 山形中央

この試合のレフェリーは、反則があって笛を吹く際、2回吹くことが多くありました。私も必要な場面で2回吹くこともありますが、些細な反則に対しても2回吹いており、必要な場面での効果が薄れてしまう気がしました。また、観戦していて必要以上に審判の笛が気になってしまいました。

② 四日市中央 VS 山梨学院

この試合のレフェリーは、反則が起きた時、タイミングよく笛が吹かれていました。タイミングよく笛が鳴るので、選手もすぐに判定を受け入れますし、ベンチ側からも声があがりませんでした。笛のタイミング1つで、ここまでゲームコントロールができることに驚きました。

2つの試合を通して、笛1つでゲームの雰囲気が大きく変わることを実感しました。

3. 研修会

日時：令和4年7月24日(日) 16時30分から17時30分

方法：Zoom

主審を担当した方が、共有した方が良い情報、事象を報告していく形で行われました。特に話題になったのが、「副審2がゴール前での混戦の中で守備側競技者が手でボールがゴールに入るのを阻止したのを確認しフラグアップをしてファールサポート。主審はプレーを停止し副審2と協議したがどの選手か分からず、GKのドロップボールで再開をした。」という事象です。この事象については、様々な意見がありました。「副審は誰かわからない状態でファールサポートすべきでなかった」、「誰か分らないので懲戒罰をせずPKで再開すべき」、「副審がフラグアップしてハーフェーライン方向に走っていないのでファールサポートなのだからその瞬間、主審が事象を探しに行くべき」などです。

4. 終わりに

初めて全国という舞台でしたが必要以上に緊張するところなく臨めたと思います。また、全国の審判員の方々と交流をさせて頂きました。当たり前のことですが、日本全国でサッカーは行われ、審判員も積極的に活動されていることを実感しました。今まで、審判の活動が兵庫県、関西に留まっていたのが、少し視野が広がったように思います。

現地の方々の暖かいサポートには感謝しかありません。日本サッカー協会や徳島県の審判協会だけでなく、試合当日は教員の方や現地の高校生も試合運営をサポートしてくださいました。特に、高校生の方には、細やかな点までサポートして頂き、審判活動がとても行いやすかったです。ありがとうございました。

この経験を、教員としてサッカー部だけでなく、他の生徒にも共有していこうと思います。また、審判員としても今回の経験を活かし今後の活動をより一層頑張っていこうと思います。

令和4年度 全国高等学校総合体育大会 視察レポート

兵庫県 津崎 泰生

参加大会：令和4年度 全国高等学校総合体育大会

- 燃え上がれ我らの闘志 四国の大地へ 四国総体 2022 -

参加期間：2022年7月23日(土)～7月25日(月)

場所：徳島県徳島市/阿南市

備考：兵庫県高体連として参加

目次：1.担当試合報告
2.試合振り返り

2.1 主審と副審が異なる意見を持った時の協力関係

(大会1日目、担当試合の振り返りより)

2.2 大会1日目に別の会場で起きた主な事象

2.3 「コントロールできる副審」になれるか

(大会2日目、観戦した試合の振り返りより)

3.事前研修会について

4.全国の審判員との関わり

5.終わりに

1. 担当試合報告

① 2022年7月24日(日) 11時30分キックオフ

大会1日目 1回戦

対戦：高知高校(高知県代表) vs 高川学園高校(山口県代表)

割当：吉田 純平氏(主審、2級宮崎県)、
杉浦 一輝氏(副審1、2級愛知県)、
津崎 泰生(副審2、2級兵庫県高体連)、
武内 優歩氏(第4審、3級徳島県)

インストラクター：大西 弘幸氏

会場：徳島スポーツビレッジ

ピッチC(人工芝)



(担当審判員：左から杉浦氏、吉田氏、武内氏、津崎)

② 2022年7月25日(月) 11時30分キックオフ

大会2日目 2回戦

対戦：聖和学園高校(宮城県代表) vs 札幌光星高校(北海道代表)

割当：宮城 修人氏(主審、2級沖縄県)、
高田 直人氏(副審1、2級東京都高体連)、
津崎 泰生(副審2、2級兵庫県高体連)、
近藤 志之氏(第4審、2級愛媛)

インストラクター：山崎 裕彦氏

会場：徳島スポーツビレッジ
ピッチC(人工芝)



(担当審判員：左から高田氏、宮城氏、近藤氏、津崎)

大会2日目 2回戦

(会場となった徳島スポーツビレッジ、通称 TSV は徳島ヴォルティスの練習場で天然芝2面、人工芝1面のグラウンド、杉の四寸角だけで組み上げられた素敵なクラブハウスがありました。)



2. 試合振り返り

- 2.1 主審と副審が異なる意見を持った時の協力関係
(大会1日目、担当試合の振り返りより)

ゴールキック、またはコーナーキックの判定で、副審(私)と主審の意見が異なってしまった場面がありました。副審サイドでディフェンスとオフェンスが競り合いながらゴールライン方向に進み、ライン際でディフェンスがゴールライン方向にクリアしてラインから出た、という事象でした。主審は近い位置で判定をしており、笛を用いてゴールキックのシグナルを行いました。

しかし、同時に副審がコーナーキックのシグナルを行い、オフェンス側の選手からも主審が抗議を受けました。抗議を受けた後、事象が明確に確認出来ていた副審が再度フラッグアップを行いコーナーキックのシグナルを示し、結果的に主審が判定を修正しコーナーキックで再開がされました。

結果的に正しい方法で再開が出来たものの、インストラクターからは下記の様な指摘を受けました。

「主審と副審がどちらも譲らない様に見え、最終的に主審が副審の勢いに負けた様に見えた。見え方を考えると両者で協議を行う絵を見せる事も方法の一つではあったのではないか？」

インストラクターの方からいただいた指摘を振り返る前に、そもそも笛を用いた主審の決定を覆す必要があるのか、という観点について言及してみたいと思います。

これは私個人の意見ですが、最終決定権のある主審の権限をフィールド上に保つ為に主審が判断し終わったものを変えるという判断は原則するべきではないと思います。(柔らかく言うと主審をスベらせてはいけないと思います。)

しかし、試合後主審からは、「実は明確に見えてはいなかったが笛で決めてしまった」というフィードバックがあった為、結果的に主審を援助出来たという形になりました。

またこれを逆の立場に置き換えると、自分が主審の際に 100%の情報を持っていないとしても副審から 100%の情報がある可能性があるので、焦って結論を出して副審からの助言の余地を無くしてしまう事は避けなければいけないと言えます。

またインストラクターの方から指摘を受けた、協議についてもレフェリーチームでどの様な形で行う事が出来たか検討を行いました。方法の一つですが、副審が主審を呼び(副審が主審を呼ぶという事は確信度がかなり高いと言えるので)「どの位自信がありますか？」と確認する。主審から「100%だ」と回答があれば副審が判定を合わせれば良いし、「実は自信がない」と回答があれば「副審の判定に乗っていただきたいんですが」と助言が出来るのではないかと話し合いました。

2.2 大会 1 日目に別の会場で起きた主な事象

レフェリーのジャッジのみならず、普段県内、地域内での試合では予想もつかない様な事象が起きる事も自分の引き出しを増やせるという意味で全国大会において学ぶ事が出来る事の一つかと思っておりますので、幾つか記載させていただきます。

- ペナルティーエリア内でボールインプレー中に副審 2 がフラッグアップを行う。

主審はゴールインのシグナルと判断をして笛を吹くも、副審が走り出さない為状況を確認。

副審は守備側のハンドを確認しフラッグアップするも、選手を特定出来ない事が判明。

ペナルティーエリアからのドロップボールで再開しようとするが、副審 1、第 4 の審判が主審を本部前に呼ぶ。

起きた事を確認する為に主審を呼んだが、この光景を見たベンチから自分達にも説明が必要だと要求を受ける。

結果的に 8 分間再開ができなかった。

- 副審 2 の前でコーナーキックを行う際に、選手が入れ替わりドリブルを開始。

ボールが明らかに動いていなかった為、副審 2 がフラッグアップ。

他の競技者がボールに触れる前にキッカーが再びボールに触れた為、間接フリーキックにて再開。

- フリーキックのトリックプレー

ボールの周辺に 3 名が位置取り、1 名が助走を取る為にボールから離れる素振りを見せた後後ろ向きに転び、

その瞬間ボールの横にいた 1 名が右横の味方競技者に短いパスを出してプレーを再開し、シュートが放たれた。

2.3 「コントロールできる副審」になれるか

(大会 2 日目、観戦した試合の振り返りより)

副審前のゴールライン際でオフenseのファウルがあったものの、そのままゴールキックで再開されたシーンがありました。選手目線ではゴールキックの方が都合が良いという考え方もありますが、この事象が前半の早い段階で起きた為、あくまで副審のファウルサポートにより試合をコントロールするという観点から記載させていただきます。

インストラクターの方から考え方の一つとして提示されたのは下記の様な内容です。ファウルとして採用する事で選手から「面倒くさい副審だ」と印象付ける事が出来る。

上記の印象を抱かれる事により選手が副審の前でファウルをし辛くなる。

結果的に主審の仕事が減る。＝副審によるコントロールが効いている状態になる。

どの場面においてファウルサポートを行うかについては別途再考する必要がありますが、主審との協力関係の中で副審主導でコントロールを効かせる事が出来るというマイルドセットは持って置いて良いのではないかと思います。

3. 事前研修会について

同じ日程で開催されるクラブユースU-18@群馬に参加する審判員と合同で研修が行われました。

研修テーマ：「一緒に試合をつくろう！」

1. 審判員のみではなく、選手チーム役員、大会役員、観客(保護者)、多くのサッカーファンとともに、
2. 試合の場面ではなく、あらゆる真年で大会を成功に導く心構えを！
3. 全国から集まる多くの仲間と親交を深めてください。
4. 体調管理、コンディション作りだけは万全を

第1回(7月1日)総体参加者のみ

：大会概要の説明

第2回(7月15日)合同研修会

：ベンチコントロール/第4の審判と主審の協力関係

→ベンチ役員も含めて一緒に試合をつくる為のマインドセットを学ぶ目的

第3回(7月20日)合同研修会

：副審のポジショニングと視野の確保について/副審のサポート/競技規則の改正について

第4回(7月23日)：大会要項の確認/大会中の諸注意

4. 全国の審判員との関わり

全国大会の醍醐味の一つに、他地域の審判員との交流があるかと思います。

交流の中で試合に対しての準備や考え方に刺激を受けたり、自分が置かれている環境が当たり前でない事に気が付いたりします。

私自身、関東から関西に移籍させていただいた際に様々な違いに驚きました。例えば、関東ではExcelで割当が共有される事はないので、他の方がどの試合をやっているか全く分からなかったりします。

東海地域では移動による負担を減らす為に、大学リーグを全て開催県の審判員で割当を行っているそうです。(地域割当ではなく、県割当)

その結果起きた事は、同一チームと顔馴染みにはなってコントロールがしやすくなるが、プール生としての他地域の試合でマネジメント力が足りない事に気が付くという事がある様です。

関西圏内の試合を満遍なく担当出来るのは有難い事なのかもしれないと感じます。

また一方で九州地域から参加されている方の話からは移動の大変さを感じました。

例えば、宮崎県所属の審判員が長崎県で試合をする時は車で5時間の移動があったり、フェリーでないと行けない場所があり欠航になる可能性があるので前泊が必須である等という話がありました。

沖縄県所属の審判員に至っては移動手段が飛行機しかない為、九州リーグには参加せず、沖縄県内の試合のみ担当している様です。

5. 終わりに

四国地方で高校総体を開催するにあたって、四国 4 県の知事が対談を行っていたのですが、その中で四国に根付くお遍路文化を根底として、我々には“お接待”文化があるという事が紹介されていました。

大変な暑さの中、地元の高校生を含め私達の見える所だけでも多くの方が運営に携わっておられました。見えない所でも大変多くの方のご尽力の上で用意していただいた舞台であったと思っています。どの大会でも根底にある思いは共通していると思いますが、今回は敢えて“お接待”文化に注目をする事で皆様との関わりの中に感謝の思いをより多く抱く事となりました。

審判員は夢と感動を支える存在としてサッカーに携わっています。この夢と感動を支えられる器が大きくなっていく事が審判員としての成長だと私は思っています。

選手や監督の 1 試合にかける思い、勝利したチームの歓喜、負けたチームの涙、またその様子が試合後直ぐにメディアに取り上げられる注目度の高い環境の高さ、これを考えると支える器はかなり大きなものでないと務まらないのだろうと思います。今後も夢と感動を支える器を大きくしていける様に努力していきたいと思えます。

最後になりますが、今大会への派遣を承認していただいた兵庫県高体連の皆様、安心して大会に臨める様援助をいただいた兵庫県サッカー協会の皆様に感謝申し上げます。

このレポートが大会で経験させていただいた事を還元するものとして、皆様のお役に少しでも立てる事を祈っております。

『令和4年度全国高等学校総合体育大会 サッカー競技大会』参加報告

2級審判員 小林清訓

私は7月23日から7月25日の3日間、徳島県で開催された『令和4年度全国高等学校総合体育大会 サッカー競技大会』に高体連研修審判員として参加させて頂きました。

まず初めに、今回このような経験をさせて頂くにあたってサポートしていただいた兵庫県サッカー協会、兵庫県高体連、また徳島県の高体連をはじめとする大会運営の皆様には感謝しております。ありがとうございました。

【大会事前研修】@オンライン Zoom

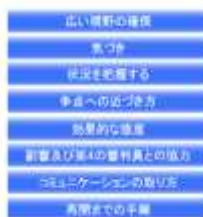
大会期間前に各90分間、3回に分けて事前研修（うち2回はU18クラブユース派遣審判員と合同）を行いました。

第1回事前研修：大会要綱や大会当日までの動きの確認

また大会の目的や参加チームの想いも含め成功させるために大きな責任があること、難しい状況ではあるが、体調管理など大会に向けて入念な準備を求められました。


第2回事前研修：『主審』をテーマとし、いかにスムーズに試合を進めていくかにフォーカスをあて、『ベンチコントロール』と『マネジメント』について映像を用いながらディスカッションを行いました。

ベンチコントロールする上で必要な要素



まとめ (マネジメントのポイント) ... 映像から学ぶもの

1 意識して見る (意識しないものは見えない)



小文字の **π**
見えていますか？

視界に入るだけ、物理的に見るだけでは意味がない。
見ようと思って見て、初めて見た価値がある。

第3回事前研修：『副審』をテーマに、いかに副審として説得力・納得感・共感・信頼を得られるのかについて、1級副審担当審判員が試合の時にどのようなことを意識し、どんな工夫をされているのかの具体例を用いながら共有していただき、自分の考えている範疇を大きく超えており、より細部までのこだわりが必要なのだと感じました。

【研修 1 日目】 7月 23 日

大会開幕前に集合し、オンラインで全体ミーティングを行いました。大会要綱の最終確認を行い、全員が同じ認識で試合にむかえる準備を行いました。

【研修 2 日目】 7月 24 日—1 回戦

[担当試合]

大分鶴崎（大分）× 帝京（東京①） 9:15 KO

R 大久保秀斗氏（岡山） AR 岡田司（福井）、小林清訓 4th 大嶽亮氏（徳島）

この試合では副審を担当させていただきました。気温がかなり高くピッチが人工芝であったため、前後半ともにクーリングブレイクと飲水タイムの両方を採用して行いました。試合中に難しい判断が求められる場面はほとんどなかったですが、主審の方とうまくコミュニケーションをとりながら取り組むことができました。またオフサイドラインキープの姿勢とファウルサポートのタイミングについてとてもよかったとのことをお言葉をいただきました。。

[全体振り返りミーティング]

全体振り返りミーティングでは、それぞれの試合会場で起きたことを全体に共有するということが行われました。運営上のことから試合中のことまで共有することで、次の試合から審判員として統一した見解を持つことができ、より良い試合を行うという点でとても重要だと感じました。

他試合での振り返りを通して、審判チームとしての協力の難しさと重要性を感じました。副審は自分の持っている情報を正しく良いタイミングで伝えられるのかどうか、主審はそれを感じられるのかどうか、第四の審判員は全体をうまく把握し適切な対応をできるかどうか、これらがかみ合うのがベストですが、うまくかみ合わない状況になりかけた場合でも冷静に対応することが大切であり、そのようなシチュエーションを日ごろからイメージすることも大切だと感じました。



【研修3日目】 7月25日—2回戦

[担当試合]

関大北陽（大阪）× 徳島科技（徳島） 9:15 KO

R 池田元氏（鳥取） AR 河野航大氏（熊本）、小林清訓 4th 仙波諒平氏（愛媛）

この試合でも副審を担当させていただきました。この試合では負傷者の対応後の再開方法について、主審の方と協議したシーンが2回ありました。副審として持っている情報を伝えたくて主審の方とうまくすり合わせることで正しい適用ができました。

また、オフサイドのフラッグアップのタイミングのわずかな遅れによって、不必要な接触を生んでしまう場面もありましたので、より速い判断ができるよう改善する必要があると感じました。

【最後に】

今回、高校総体に参加させていただいたのは2回目となりますが、前回とはまたひと味違った充実感のある3日間となりました。感染症対策の観点から実地での全体研修などは行えませんでした。様々な地域の方々と交流し、より一層サッカーそして審判の面白さを感じることができました。

この大会に参加したからこそできた経験や感じたことを、今後の審判活動にいかし、より成長できるように取り組んでいきますのでご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

最後となりましたが、このような貴重な経験をさせていただいた兵庫県サッカー協会、兵庫県高体連、また徳島県の高体連をはじめとする大会運営の皆様には感謝申し上げます。ありがとうございました。

クラブユースU-18（前橋）参加報告

関西カテゴリーII 審判員 朝井 隆浩

1. 参加期間 7/23（土）～7/28（木）
2. 参加形態 他地方のアカデミー審判員の代打
3. 担当試合 全4試合

①7/24（日）8:45 ジュビロ磐田U-18 vs ベガルタ仙台U-18

ins:正木修一

R:永谷颯太郎（九州 RAC）、AR1:朝井隆浩、
AR2:高柳拓生（関東 U-22）、4th:芳賀修斗（栃木 2 級）

②7/25（月）8:45 大宮アルディージャU-18 vs アルビレックス新潟U-18

ins 高橋武良

R:小川稜（九州 2 級強化）、AR1:朝井隆浩、
AR2:阿部聖汰（東北 RAC）、4th:佐藤佑樹（栃木 2 級）

③7/27（水）8:45 モンテディオ山形ユース vs アビスパ福岡U-18

ins:正木修一

R:朝井隆浩、AR1:渡邊駿（北信越 2 級強化）、
AR2:伊藤慶太（関東 2 級強化）、4th:芳賀修斗（栃木 2 級）

④7/28（木）8:45 川崎フロンターレU-18 vs 東京ヴェルディU-18

ins:伊藤力喜雄

R:美川笙乃（関東 RAC）、AR1:中村一貴（1 級宮城）、
AR2:朝井隆浩、4th:原田一輝（関東 2 級）

4. 参加の感想

当初、当大会は、レフェリーアカデミー（RAC）やU-22の2級強化審判員、関東の2級審判員とベスト16からは1級審判員が参加し、若手が中心となる大会でした。しかし、コロナウイルスの影響により、不参加の審判員が出たため、今回は、アカデミー枠での追加の派遣をいただきました。7/23（土）に集合の大会でしたが、7/19（火）に追加で参加の依頼が来たため、準備時間がない中での参加となりました。

準備の段階では、“全国大会の審判”しかも、“その期間住み込みでの参加”ということで、まず大変だったのが、審判服の入手とレフェリーウォッチの入手でした。関西強化部の廣嶋さんから派遣依頼をいただき、最初にしたことが、サッカーショップカモへの電話でした。新しいモデルの審判服の調達と時計 3/5 が電池切れの中、大会期間中の連戦でも落ち着いて活動ができるために時計を調達に行いました。

審判服については、普段の割当では、そこまで考えることは少なかったですが、今回はメディアや大会運営、チームに少しでもまとまった審判チームを見せるために、主審に合わせて同じものを着ることが最初の準備と考えていたからです。笑われるかもしれませんが、兵庫を代表していくからには、身なりから整え、モチベーションも全国の若手審判員に劣らない準備をしたいと思っていました。

参加に向けてのモチベーションとしては、近畿総体、和歌山国体、以来の大きな大会への参加のため、「またチャンスがもらえた」、「最後のチャンスかもしれない」…などの様々な気持ちはありましたが、最終的には、①駆け出しのころに参加した大会からの成長を客観的に感じたい、②新しい発見をしたい、の2つのキーワードを参加のモチベーションとしました。

大会参加を終えての感想は、上記①のキーワードは、AR1を2試合する中で、Rや4thの若手審判員とコミュニケーションをとり、死角を作らないことや、チームへの関わり方を一緒にマネジメント、試合運営をすることができました。どんどん自分からチャレンジしたい若者との関わりをする中で、一歩引いて観る自分を感じて、客観的に自分が大人になったと感じることができました。(笑)

上記②では、今大会は、全てのチームがJリーグの下部組織となっており、コーチングスタッフも元プロの選手という状況でした。その中で、特に、AR1として活動する中で、ベンチからの“プロの本音”を聞くことができたのがとても良い経験でした。監督によっては、すぐに主審の経験が浅いことを見抜き、率直に質問してくる方もおられました。また、プロならではの、プレーの流れや先行きを見通しての質問もありました。少しではありますが、プロの感覚、視点に触れることができたのはとても楽しかったです。

私が、若い頃に戻れたとしたら、日頃からは、審判仲間だけでなく、チームのスタッフや選手の方々ともっと長い目で見て親しくなっておきたかったなと強く思いました。審判員はいろんなイメージで覚えられていますが、審判員がどれだけ個々の選手やスタッフのことを覚えているかが、相手を大切にできているかにつながってくると思います。お互いがお互いを大切にできれば、もっといい試合が一緒につくれるかなと今回の参加で改めて感じました。今思えば、チームの方々とは最近ようやく話ができるようになってきたので…朝井はその辺のところ後悔してます(笑)。

また、最近心が得ていることは、試合前の挨拶はもとよりなんですが、最近はキックオフ直前に両ベンチの監督さんに一声かけてから始めるようにしています。駆け出しとみられても、人間関係を作りたいと思ってこちらからオープンマインドになり、聞く耳持ちますよとか、何かあれば教えてください…のようなスタンスが作れると下手でも駆け出しでも、まず入りからこちらをみてくれるのではないかと考えています。下手でもいい関係が作れるのではと思います(理想ですが…笑)。

最後に、大会を通じて、担当試合の割当よりもわかるように、関西以外の地域の審判と一緒に試合を作っていくことができたことは、とても良い経験になりました。情報交換を通じて、それぞれの地域の特性や、楽しさもたくさん聞くことができました。

大会に臨むにあたって、日々のトレーニングや、いつチャンスが来てもいいように心と体に準備をし、常に上を狙う野心を持ち続けておれば、柔軟な対応もすることができると実感しました。併せて、日々の意識だけでなく、その年の開幕からの力に発揮、キックオフからベストパフォーマンスでガーっと行くメンタリティと自分を表現するパーソナリティを今後も磨いていきたいです。

貴重な経験をさせていただき、関係の方々には感謝です。これを糧にまた頑張ります。



佐藤 翔太（兵庫県） 奥村 颯太（京都府） 加藤 展裕（京都府） 和田 雄次（大阪府）
朝井 隆浩（兵庫県） 村上 伸次（アセッサー） 中本 早紀（兵庫県） 角山 勝洋（アセッサー）

第46回 日本クラブユースサッカー選手権(U-18)大会

大会参加報告

2級審判員 佐藤翔太

大会名 : 第46回 日本クラブユースサッカー選手権(U-18)大会

開催日程 : 2022年7月23日~27日

場所 : 群馬県内 各サッカー会場

参加者 : INS・・・角山勝氏 村上伸次氏

審判員・・・和田雄次氏、加藤展氏、朝井隆浩氏、奥村颯太氏、佐藤翔太

【はじめに】

大会期間中お世話になりました大会関係者の皆様に感謝申し上げます。

また、普段よりご指導いただいております関西サッカー協会、兵庫県サッカー協会、明石サッカー協会、その他ご指導いただいている皆様に感謝申し上げます。

以下、大会参加の報告をさせていただきます。

【事前研修会】

事前研修会が3回開催されました。

第1回事前研修会

・7月5日(火)20:00~21:30

第1回目の研修会では、大会当日前の準備事項の説明や、大会が始まってからの流れと注意事項を中心にご説明いただきました。その後、JFAの泉氏から「一緒に試合を作ろう!」というテーマが発表されました。このテーマを元に、各審判員は自分の役目や行動を考えていきました。

第2回事前研修会(主審編)

・7月15日(金)20:00~21:30

第2回から、インターハイ参加メンバーとの合同研修になりました。

〈①ベンチコントロール : 講師 新田氏〉

まず始めに映像を視聴し、何が起ってチーム役員がどんな行動を行い、審判団がどのような対応を行ったのか確認していきました。次に、なぜチーム役員はこんなにも異議を示しているのか、何のために異議を示しているのかを考えていきました。またそこから、審判団としてどのような対応をしていけば良かったのかを考察しました。

(1)なぜ異議を言うのか

- ・フラストレーション
 - 判定への不満
 - 自チームへの不満（戦術）
 - 相手チームへの不満（安全）
- ・その他
 - 自チームへの叱咤激励・鼓舞
 - 審判員へのプレッシャー など

(2)ベンチコントロールをする上で大切な要素

- ・広い視野の確保
- ・気づき
- ・状況を把握する
- ・争点への近づき方
- ・効果的な態度
- ・副審及び第4の審判員との協力
- ・コミュニケーションの取り方
- ・再開までの手順

この講義から審判員として、多くの気づきを持って原因を察知し、その中から場面に応じた適切な対応を取る必要があるのだと学びました。

〈②マネジメント：講師 脇山氏〉

映像を見てのグループディスカッションが中心となりました。

この映像は、試合時間残り5分、メイン側タッチライン上、メインから見て左側ゴールライン側のテクニカルエリア付近で、1点差で負けているチームがファウルを犯して大きなチャンスとなる攻撃を阻止したとしてイエローカードが提示されます。その後、勝っているチームは自分たちのベンチ前ということもあり飲水を行い出しますが、負けているチームはベンチが遠く相手のフリーキックのため飲水出来ないという状況でした。

私たちのグループでは、片方のチームだけが飲水をしているという不公平さに注目し、話を進めていきました。

（グループ内意見）

- ・声かけを行う等でプレーへいち早く戻す
- ・イエローカードが出ているからなかなかすぐに再開させられない
- ・先に壁等のコントロールをしまって用意を調べてしまってから声をかける

など、様々な意見が出ました。

次に全体では事実と問題点に分けて話し合いました。

1.事実

- ①A チーム 11 番が左サイドのドリブルで突破するところを B チーム 61 番がファウルチャージで阻止した。主審は走り寄り、反スポーツ行為として警告した。
- ②ファウルは、A チームのベンチ前で 11 番がすぐに立てなかったため、チーム役員を 1 名入れて対応した。
- ③その間に A チームの選手 8 名が戻り、ベンチ前で飲水を始めた。
- ④B チームの選手たちは、その間、ポジションに着いたままずっと待っていた。

2.問題点

- ① 1 対 0 で B チームが負けている場面で 7 月 26 日は大変暑いコンディションであり、大変不公平なマネジメントだった。
- ②日テレのベンチ前であり、頭等の重大な負傷では無かったので、直ぐにフィールドの外に出して対応した方が良いマネジメントだった。

と言うようにまとめが行われました。

またそのときのマネジメントのキーワードとして、

1.意識して見る（意識しないものは見えない）

- ①何を見るか
 - ・同時に発生する事象の何を（どこを）見るか
- ②どの範囲を見るか
 - ・いくつの事象を見るか
 - ・見えるものを増やす必要はないか
- ③どこから見るか
 - ・どの方向、どの位置から見るか
 - ・俯瞰的な見方をしたらどう見えるか

2.見えたものに対し何をすべきかを的確に判断する

- ★サッカー競技の精神、競技規則の精神に基づき、判断する。
 - ・フェア（公平・公正）
 - ・安全・安心
 - ・快適なプレー
 - ・競技規則

3.判断に基づき実行する

- ★主審の的確な判断に基づき、実行する。
 - ・リーダーシップの発揮
 - ・毅然とした態度

と言う3つのキーワードを学びました。

この事象に対して、上手く試合を再開させる事がとても難しいなと感じました。

その上で、声をかけるタイミング・フリーキックマネージメントの行い方・負傷者の対応などに対して、様々な引き出しを持って対応していくことが求められているのだと感じました。

第3回事前研修会(副審編)

〈①オフサイド・ポジション・視野 :講師 佐藤氏〉

まず始めに、副審にとって大切なことは何ですかという問いを投げられた。

受講生から様々な意見が出た中で、姿勢・フラッグ・ポジショニング・視野の確保について考えていきました。

■姿勢

- ・直立、大きく見せる
- ・常に見られているという意識…
⇒説得力・納得・共感・信頼…

■フラッグ

- ・わかりやすさ、伝える力、タイミング
- ・レフェリーチームワーク…
⇒説得力・納得・共感・信頼…

■ポジショニング

- ・ポジショニングは Best or Worst
- ・リアクションの動き(限定的で制限がある)

と言ったように、主審と副審ではポジショニングについての考え方が全く異なるということを初めに学びました。また、重要であるオフサイドラインのキープ方法については、現役1級審判員の皆様からの意見を共有していただきました。

その中でも特に、

- ◇どのスピードまで、どの走り方で自分が対応できるかを知っておく
- ◇野球の盗塁が上手い選手を研究する

という意見が新鮮で、新しい自分の引き出しが増えました。

■視野の確保

こちらも、現役1級審判員の皆様からの意見を共有していただきました。その中でも特に、

- ◇足元にスペースがなかったり、競技者が近くにいるのであれば、上半身を多少反る
- ◇具体的にパーセントを決めて2つを見る(出し手・受け手)

は自分がしていないことだったので、取り入れたいと感じました。

〈②副審のサポート : 講師 佐古氏〉

まず初めに、アンケートを採られた結果を提示されました。

アンケートによると、約30%の審判員がファウルサポートしか行っていないという結果が出ました。また、ファウルサポートを行っている審判員の8割以上が主審主導で行っていると回答していました。

この結果を受けて、「積極的なサポートをするためには」というお話をしていただきました。そのために特に重要なことが「自分の目の前のプレーに責任を持つ」ということでした。

私自身、自分の目の前でファウルサポートの際に、判定を主審に委ねている部分があったので、その辺りも今大会の1つの目標としたいなと思いました。

〈③競技規則改正：講師 上川氏〉

今大会から新競技規則が適用されるため、競技規則の改正点の解説をしていただきました。

【7月23日(土)：1日目】

宿泊施設、研修会場である「グレースイン前橋」に17時頃に到着しました。

20時から研修が始まり、翌日から始まる試合の大会要項を確認し、その後割当の発表がありました。

【7月24日(日)：2日目】

グループステージ第1日 柏レイソル - V・ファーレン長崎

R：表慶 氏(北信越 地域2級)、A1：一瀬哲平 氏(北海道 RAC)

A2：佐藤翔太(関西 U-22)、4th：佐藤 靖 氏(地域派遣)

この試合では、警告の人違い疑惑という大きな経験を致しました。

後半22分、メインスタンド側・メインスタンドから見て左側・レフェリーサイドベンチ前・タッチラインから5mほどの場所でファウルが起きました。ファウルは、攻撃側ディフェンスから攻撃側中盤の選手にくさびのパスが入ったところ、守備側競技者2人(4番:押す6番:タックル)が絡むものでした。主審はアドバンテージを採用し、次にボールがアウトオブプレーになったときに4番に対して反スポーツ的行為(ラフプレー)で警告しました。それに対して警告を出されたチーム役員から、人違いだという声が上がりました。主審はファウルを犯した競技者の特定をできていましたが、チームから声が上がったことにより不安になったようです。

その後、メインスタンド側であることから、主審・副審1・第4の審判員と協議を行いました。副審1・第4の審判員共に特定できておらず、最初の主審の判定を採用し、試合を再開しました。この間、約4分間試合が止まってしまいました。副審2の私はファウルを犯した競技者を特定できていましたが、主審に情報を渡すことができませんでした。

その理由としては、

- ①最初に主審が警告した競技者で合っている
- ②主審から要求がない
- ③協議して結果が出なければ副審2に聞きに来るはずだ

というような考えがあったからです。しかし現場では、主審が私に情報を求めることなく、疑いが残ったまま再開してしまいました。

この事象を振り返り、副審として主審を呼んで情報を伝えるべきだと反省しました。特にこの事象では「主審が全くこちらを見ない→協議が終わって結論がでなかったらこちらへ来るだろう」という主審に頼りきりな考えがよくなかったのだと思います。

協議が始まって、なかなか結論が出ないと感じたタイミングで、主審を自分から呼んで情報を伝えることで、空費される時間も減り、より説得力と自信を持った判定になると学びました。また、イレギュラーな状況下で、副審主導のもと逆サイドで協議をしている主審を呼ぶことのハードルの高さを感じ、主審として情報を取りに行く(副審2にも聞く)ことの大切さを学びました。

【7月25日(月) : 3日目】

グループステージ第2日 名古屋グランパス - 湘南ベルマーレ

R: 金丸拓哉 氏(九州 地域2級)、A1: 上森雄弥 氏(中国 地域2級)

A2: 佐藤翔太(関西 U-22)、4th: 橋本文 氏(地域派遣)

本日の試合では、アディショナルタイムが経過する前に前半終了の笛を吹いてしまうという事が起きました。

主審はアディショナルタイムを2分追加しました。しかし、アディショナルタイム1分30秒程が過ぎたときに前半終了の笛を吹いてしまいました。これが起きた原因は、主審の時計の見間違いでした。

審判団としてこの事象が起こった時に、

A1・・・競技者がベンチに戻るのを止める

A2・・・主審にアディショナルについて確認する

4th・・・本部で時間を確認する

というように、良いチームワークでスムーズに試合を再開し、残りのアディショナルタイムを行いました。

前日のサポートできなかった反省を活かし、率先して主審に対してコミュニケーションを取ってサポートできたことは良かったと思いました。

【7月26日(火) : 4日目】

本日は、休日でした。生活サイクルを変えないため、試合がある人と同じ時間に起床し、モーニングトレーニングを行いました。

また、他の地域の審判員の方と一緒にトレーニングを行ったり、映像分析を行ったりと有意義な休日となりました。

【7月27日(水) : 5日目】

グループステージ第2日 名古屋グランパス - 湘南ベルマーレ

R: 青木智仁 氏(四国地域2級)、A1: 大藤翔平 氏(中国地域2級)

A2: 佐藤翔太(関西 U-22)、4th: 鈴木幸 氏(地域派遣)

最終日はグループ1位の浦和レッズと、グループ2位を狙う湘南ベルマーレのトーナメント進出をかけた試合でした。

試合開始6分、浦和レッズが湘南ベルマーレのディフェンスの裏を抜け出し、先制点を決めます。しかし、このゴールについて湘南ベルマーレはオフサイドだと主張してきました。かなり際どい判定でしたが、オフサイドラインに正体し、正しくオフサイドを見極めることができました。

大会を迎えるまでにトレーニングをしていたようなシーンだったため、落ち着いて判定をすることができ、トレーニングや準備の大切さを改めて実感しました。

【試合中の事象を振り返って】

大会中起きた事象についてまとめを行いました。

1)イエローカード人違い疑惑

↳なぜ、そのようなことが起きたのか

競技者二人が絡む(4番・6番)ファウルで、同時にファウルが起きたため。

またその上、縦のロングボールが入り、主審がアドバンテージをかけた事によってその場での対応が出来なかったため。

↳現場ではどのような対応をしたのか

まず主審は4番に警告を提示しました。

その後、主審・副審1・第4の審判員で協議し、4番と特定して試合を再開しました。

↳起きない為にやるべきことはなんだったのか？また、起きてしまったときの一番適切な対応はなんだったのか？

アドバンテージの際に、何番に警告を行うのかを主審が声に出して知らせることが必要でした。また、第4の審判員の目の前であったため、第4の審判員が特定しておくことも必要でした。

↳ARとしてどのような対応をしたのか？また、ARとして最適な対応はなんだったのか？

アウトオブプレーになったタイミングで主審に対して4とシグナルを送りました→主審は見なかった。その後、協議している時の全体の監視を行いながらサポートのタイミングを伺っていました。ARとして、協議が始まって答えが出ないと感じた時点(1分後ほど)に主審を呼んで情報を伝えるべきでした。

2)アディショナルタイムが短く終わってしまう

↳なぜ、そのようなことが起きたのか

主審が時計を見間違えたため

↳現場ではどのような対応をしたのか A1 競技者がベンチに戻るのを止める

A2 主審にアディショナルについて確認する

4th 本部で時間を確認する

↳起きない為にやるべきことはなんだったのか？また、起きてしまったときの一番適切な対応はなんだったのか？

主審が第4の審判員だけでなく、副審にもアディショナルタイムを共有しておくべきだと感じました。それにより、よりアディショナルタイムについての意識がよ

り高くなるのではないかと思います。最適な対応としては、現地での対応が最適だったのではないかと思います。

↳ARとしてどのような対応をしたのか？また、ARとして最適な対応はなんだったのか？

主審に「アディショナルタイムは何分取りましたか？」「今1分36秒しか経っていないので、残り24秒残っています。」と伝えました。この伝え方が最適だったのではないかと思います。

【大会を振り返って】

大会に参加し、普段なかなか経験できないような貴重な経験をさせていただきました。

その中で、副審として主審をサポートするということの難しさを改めて実感した大会でした。イレギュラーな事象が起きたとき、どう審判団で協力して、どう正しい判定に持っていかかということをもう一度考えていかなければならないと学びました。また、迷ったら実行に移すこと、モヤモヤを試合中に残さないことが重要だと学びました。

一方で、オフサイドラインのキープやタッチジャッジでのサポートについては上手くサポートすることができました。この部分は強みとしてこれからも磨いていきたいと思えます。また、コロナ下でなかなか機会が限られてしまいましたが、全国から集まった多くの審判員、インストラクターの皆様と交流を持つことができました。

皆様と判定について議論したり、一緒にトレーニングをしたりする中で、様々な考え方や捉え方を学び、多くの刺激を得ることができました。またそれと同時に、主審としてこの大会に戻ってきたいと強く思いました。

大会のテーマである「一緒に試合を作ろう！」という視点では、試合会場のラインが薄くて見えにくい状況で、朝早くからラインを引きに来てくださる業者の皆様や、暑い中朝から集まってくださった現地の中学生、試合映像を放送してくださった方々、慣れない中でも環境を整備してくださった大会運営の皆様、試合会場まで送ってくださったタクシー会社の皆様、チーム・応援に来ている保護者の皆様、、様々な人の力でこの大会が成立しており、盛り上がっているのだということを改めて実感しました。

また、様々な立場の方々とお話をさせていただく中で「大会を成功させたい」と皆さん思われており、立場は違うけれどみんなでひとつの目標に向かってそれぞれが頑張っている、これこそ「みんなで試合を作る」ということなのだと思えました。

大会に関わっていく中で、審判団としてどう立ち振る舞うか、どう願うのか、どう試合をコントロールしていくのかということが「一緒に試合を作る」という意味を考えることで大きく変わってくると感じました。

この大会に参加させていただき、たくさんの貴重な経験をさせていただきました。学んだことをこれからもっと深めていき、自分のものに変え、より成長していければと思います。そして、微力ですが少しでも関西・兵庫・明石に還元させていただければと思います。

大会参加にあたり、日頃からご指導いただいている皆様、また大会期間中お世話になった皆様、本当にありがとうございました。